

平成21年3月17日

フクユタカにおける狭畦無中耕無培土栽培について ～ 津市大豆作の紹介～

三重県 津農林水産商工環境事務所
(津地域農業改良普及センター)

1. 津市大豆作の概要

三重県津市大豆作は、麦跡の水田転換畑での作付けが主流で、平成20年産大豆の作付面積は486haです。当地域でも担い手への集積が進み、大豆経営規模10ha以上の大規模経営体が大豆栽培全面積の60%以上を担っています。

2. 狭畦無中耕無培土栽培について

条間を30cm程度とし播種後に慣行(写真1)では2回程度実施する中耕および培土を実施しない「狭畦無中耕無培土栽培(写真2)」が、大豆栽培面積と共に増加しています。管内には2つの広域農協がありますが、「狭畦無中耕無培土栽培」を導入しているのはT農協管内の経営体のみです。平成20年産では約280ha栽培されており、県内で最も普及しています。導入した経営体のほとんどは、その省力的な栽培法に大きなメリットを感じています。

3. 狭畦無中耕無培土栽培の特徴

大豆の中耕・培土作業は水稲関連の作業と重複しているため、大規模経営体ではその作業の負担が大きくなっています。一方、この「狭畦無中耕無培土栽培」はそれらの作業が省略できるため、大規模経営体向け省力技術として注目されています。また、中耕・培土による畝がないことから、コンバインによる収穫作業の精度が高くなり収穫ロスが抑制され、土等の巻き込みによる汚粒の発生も抑制されます。

しかし、管内大豆作の主力品種「フクユタカ」では、特に播種が慣行栽培以上に早い場合には中耕・培土作業の省略によって倒伏し易くなり、収穫作業性と収量性の低下を招くことがあります。このため現在、県では慣行栽培で播種が遅くなった場合の補完的栽培技術として位置づけられています。

4. 課題について

フクユタカによる狭畦無中耕無培土栽培の主な課題としては、

フクユタカの耐倒伏性が低いため、年次によっては播種時期に関わらず倒伏しやすく収量・品質低下を招いています。

収穫後の大豆残渣が跡作の水稲において作業上の障害となっており、地主が大豆作を敬遠しています。このため、担い手の大豆作経営面積拡大の阻害要因になっています。

これら課題解決のために、 については、耐倒伏性の高い優良品種の導入、 については、大豆残渣の適切な処理方法の確立が求められています。



写真1 慣行(中耕培土あり)栽培



写真2 狭畦無中耕無培土栽培